

-----  
・発表原稿がやや大部になりそうのため、その一部を利用して事前資料としておきます。当日の発表では、この部分についてはなるべく簡略に済ませる予定ですので、御了承下さい。

・主として「1」の部分では私の発表の基本的な趣旨について述べてあります。また「2」の部分では主な検討対象であるエヴァンズの見解の大よそについて——私の議論に必要な範囲で——簡単にまとめてあります。

-----

1.

本稿では、自己同定に関する G・エヴァンズの見解を議論の糸口に、彼の立場の理論的基盤を批判的に検討する中から、自己の概念をめぐる哲学的考察において目指されるべき一つの方向性を描き出すように努めたい。あるいは、こうした方向性に大筋で沿った幾つかの試みが現に押し進められつつあることからすれば、本稿での狙いはむしろ、それらの提案を貫いている主要な動向と動機を浮き彫りにすることであるとも言える。そのための手引きとして参照するのが、エヴァンズの見解を準拠点とする見取り図である。ここではまず、この見取り図の大まかな地勢をなぞりながら、本稿での基本的なスタンスを明確にしておくことにしたい。

自己概念をめぐるエヴァンズの考察は、それ以前のシューメイカー (Shoemaker [1968]; Shoemaker [1970]) らによる「誤同定への免疫性 (immunity to error through misidentification)」(以下、「免疫性」と略記する) をめぐる議論を独自に組み立て直し、そこに新たな方向付けを与えた。ここで言う免疫性とは、大まかに言えば、「a は F である」という形式の判断の特殊なクラスにおいては、F だと知られているその何かが a 以外のものと取り違えられることがあり得ない、という特異な現象である。言い換えれば、「a は F である」という判断が免疫性を持つ場合、何かが F だと知ることは、F であるのは a だと知ることと等しいのである。シューメイカーは、ある種の一人称的判断においてこうした現象が出現する根拠を、心的な特性を表す述語の使用に求め、免疫性という現象を、自己と心的特性との独特の結び付き (心的特性の主体としての自己) の表れとして捉えようとしたのだが、これに対してエヴァンズによれば、免疫性についての正しい理解はむしろ、心

的特性のみならず身体的・物理的特性の担い手としての自己という描像を切り開くことになる。エヴァンズにとって、一人称的判断における免疫性の解明は、この世界の内に一つの対象として存在する物理的・身体的な自己のあり方を、(単なる一対象に関する認識のあり方とは根本的に異なる) 自己に関する認識様態の特異性と調停することによって、根本的に反デカルト主義的な自己像を権利付けることに繋がるのである (VR, pp. 216-7; p. 224) (注1)。

だが以下で見るように、このエヴァンズの野心的な企てを支える理論的基盤は大きな困難を抱えている。そこで、彼の考察の土台をかなり大掛かりに再編し直すことによって、彼の反デカルト主義的な企ての「精神」を救い出すための方向性を探ること、——これが本稿の狙いである。

シューメイカーからエヴァンズへの展開を大きく特徴付けているのは、大まかに言えば「言語から思想 (thought) へ」という方向性であった。シューメイカーが免疫性を文もしくは言明の性質として捉え、一人称的判断の免疫性と心的な述語との結び付きをクローズアップしたのに対して、エヴァンズは思想 (つまり、人が言明の意味を理解する際に理解している当のもの) の水準に考察の場を定めることによって、免疫性という現象のあり方を——個々の思想とその認識基盤との関連性に照らして——いっそう理肌細かく読み解く道を開いた。こうした流れを承けつつ、本稿で描き出そうとするのは、「思想からアーキテクチャーへ」とでも呼ぶべき方向性である。だが、その意味する所を述べるに先立って、あらかじめエヴァンズの基本的な理論的構図について見ておくことにしたい (注2)。

## 2.

### (1) ラッセルの原理と「写真モデル」批判

エヴァンズが自らの「思想の理論」の根幹に据えるのは、思想もしくは判断の帰属に関する「ラッセルの原理」と呼ばれる原理、つまり、「或る対象に関して判断を下すことができるためには、主体は、自分の判断がどの対象に関わっているのかを知っていなければならない」(VR, p.89) という旨の原理である。ここで要求されている知識 (どの対象であるかを知っている) とは「対象の識別知 (discriminating knowledge)」、つまり当該対象を「他の全ての事物から区別する能力」(VR, p.89) を持っているということである。

この原理を据えることによってエヴァンズが特に斥けようとしているのは、彼の言う「写真モデル」理論、つまり、主体と対象との間でのしかるべき因果的連鎖の成立を以って、主体がその対象に関する思想を抱くに十分だとする立場である。

### (2) 観念

一方でエヴァンズは、「P という思想を抱くためには、主体は、P ということが真である

というのはいかなることであるかを知っていなければならない」という原理を「自明の理」(VR, p. 106)として受け入れる。(ここでは仮にこの原理を「真理条件の原理」と呼ぶことにする。また、Pということが真であるとはいかなることかという知識を「Pの真理条件の知識」と呼ぶことにする。)エヴァンズの課題は、この真理条件の原理を実在論的な仕方でも認めつつ、ラッセルの原理を満たすような妥当な「思想の理論」の枠組みを探ることである。

その鍵を握るのが、思想が本質的に持つ構造的な性格——思想に関する「一般性制約」(VR, p. 100)——である。一般に、〈aはFである〉という思想は、対象aについて考える能力(aの観念)と特性Fについて考える能力(Fの観念)という二つの概念的能力の行使からなる構成物である。ここで言うaの「観念」とは、〈aはFである〉という思想のみならず、〈aはGである〉、〈aはHである〉、…等の無数に多くの思想においても一般的に行使可能な概念的能力である(注2 a)。

したがって先述の課題は結局のところ、いかにして観念は成立し得るのかという問題に帰着する。〈aはFである〉という判断の真理条件の知識は、aの観念およびFの観念のそれぞれがもたらす知識からの所産であるが、中心的な問題は、ラッセルの原理を満たすような(つまり当該対象の識別知をもたらすような)対象の観念がいかにして成立し得るのか、ということである。

### (3) 基礎的思想レベル

一般に対象(抽象的对象、具体的対象を含めて)は、それが属する種(数、形、色、…)に応じた「基礎的区別根拠」(VR, p. 107)を持つ。例えば数という種については、数系列上の位置付けがそれに当たる。数3の基礎的相違根拠は数系列上の三番目に位置することであり、これによって数3は他の全ての対象から区別される。

ここで、主体が或る対象を、その基礎的区別根拠を持つものとして考えている場合、主体はその対象の「基礎的観念」(VR, p. 107)を用いているのだと言うことにすれば、基礎的観念を用いた判断は一般にラッセルの原理を満たす。というのも、そうした判断において主体は対象をその基礎的区別根拠によって他の全ての対象から区別することができるからである(注3)。

だが対象はまた、その基礎的区別根拠を持つものとして以外の仕方——つまり基礎的観念を用いた以外の仕方——でも考えられる。(例えば数3は単純に「私の一番お気に入りの数」のような仕方でも考えられる。)では、そうした「派生的観念」(VR, p. 109)を用いた判断は一般に、いかにしてラッセルの原理を満たすことができるのか? 基礎的観念との繋がりによって、というのがエヴァンズの答えである。そもそも主体が或る対象についての派生的観念(a)を持ち得るためには、彼は任意の基礎的観念 $\delta$ について、〈 $\delta = a$ 〉という同一性命題が真であるというのほどのようなことであるかを知っていなければならない。あるいはむしろ、派生的観念aを持っているということは、〈 $\delta = a$ 〉という形式の任

意の同一性命題について、その真理条件を知っているということに他ならない。したがって、〈aはFである〉という思想を把握する（〈aはFである〉の真理条件を知っている）ということは、つまり、任意の基礎的観念 $\delta$ について、〈 $\delta = a$ 〉および〈 $\delta$ はFである〉という一組の命題の真理条件を知っているということに等しい。そして、基礎的観念とのこうした繋がりによって、派生的観念を用いた思想もまたラッセルの原理を満たすことが保証される。

こうしてエヴァンズの基本的な課題は、派生的観念を支える基礎的観念からなる層——「基礎的思想レベル」（VR, p. 112）——を設定することによって成し遂げられることになる（注4）。

#### （4）情報システム

エヴァンズは、固有名の使用をはじめとする言語的コミュニケーションの実践を情報の流れとして捉える視点を早くから打ち出していたが（Evans [1973]）、彼によれば言語的コミュニケーションのみならず知覚や記憶といったわれわれの認知活動は総じて、情報の獲得、収集、保持、伝達という因果的プロセスとしても捉えられる。この観点からすれば、主体の営む様々な認知活動とは、種々の情報リンクを介して情報のやり取りに關与する「情報システム」（VR, p. 122）の働きである。（さらには、そうした個々の主体＝情報システムの間で取り交わされる情報の流れは巨大な「社会的情報システム」（VR, p. 125）を形作ることにもなる。）エヴァンズによれば、こうした情報システムのあり方は、感覚や信念といった旧来の認識論の概念によってはうまく把握することができない。情報は（感覚のように）内容を欠いた“生まの与件”ではないし、また情報システムの働きは——知覚的錯覚のケースにおいてははっきりと認められるように——主体の抱いている信念からは独立している。情報システムの活動は、動物とも広く共通するようなわれわれの原初的な認知能力に支えられているのである（注5）。

#### （5）空間的表象

エヴァンズによれば、〈これ〉という直示的観念や〈ここ〉、〈私〉の観念は、上述のような「思想の理論」と「情報の理論」の双方に立って統一的に説明される（cf. VR, ch. 5, Appendix）。この説明の中心部分をなすのが、空間的表象の理論である。ここでは特に直示的観念を例に、それを見ていくことにする。

主体が或る対象（注6）を〈これ〉として考えることができるためには、その対象は何らかの知覚様態を通じて主体に与えられていなければならない。直示的観念が成立するためには、一般に、それに相応しい知覚的メカニズムの働きを中心として、当該対象からの直接的な情報獲得を可能にするような情報リンクが成立していなければならない。直示的観念と情報リンクとのこうした結び付きは、さらに、対象を目で追いつけるといったような、われわれの持つ「きわめて基礎的な知覚的技能」（VR, p. 146）に支えられている。し

かし、「写真モデル」理論を斥けるエヴァンズにとっては、こうした情報リンクの存在を以って直示的観念の成立に十分だと考えることはできない。直示的判断の可能性もまた、ラッセルの原理を満たすような形で説明されなければならないのである。では、対象を直示的に考えること、つまり対象の直示的同定には、情報リンクを介した対象との因果的な結び付き以外に、一体何が関わっているのか？

一般に対象（物理的対象）の基礎的区別根拠は、それがいかなる種概念（sortal）に該当するか、および任意の時点においてどの空間的位置を占めているか、によって与えられる。したがって、直示的観念が対象の空間的位置の表象を介してその識別知の把握（＝基礎的観念）と適切に結び付けられるならば、そうした直示的観念を用いた直示的判断がラッセルの原理を満たすことが一般的に保証されることになる。

ところで空間は、一方では、自己を原点に前後・左右・上下といった軸に沿ってパースペクティブ的に広がるものとして「自己中心的（egocentric）」（VR, p. 153）に表象される。対象や場所を〈これ〉や〈ここ〉として捉える直示的観念も、差し当たってこうした表象の体系に属している。この自己中心的空間は、「知覚的インプットと行動的アウトプットとの連関の複雑なネットワーク」（VR, p. 154）に支えられた空間把握、われわれの「行動空間」（VR, p. 160）に他ならない。そして、対象からの知覚的情報リンクが成立している場合、主体は一般に、その対象を自らの自己中心的空間の内に直ちに定位することができる。

だが、自己中心的空間がそもそも“空間”表象であるためには、それは「客観的」もしくは無視点的な空間表象（注7）——特定の中心からのパースペクティブ無しに、どの場所もみな同じ仕方で捉えられるような表象方式——と照合することが可能でなければならない。また、客観的な対象の直示的観念が成立し得るためには、その対象は単に自己中心的に定位されるばかりではなく、こうした無視点的な空間の内にも位置付けられるのでなければならない。

ところで、われわれには、そうした自己中心的な空間表象を無視点的表象と照合させ重ね合わせるという一般的能力が備わっており、これによって、自己中心的に定位された対象の位置  $p$  が無視点的空間内の位置  $\pi$  と同一であるというのがいかなることであるかを理解することができる。こうして、位置  $p$  にある対象を〈これ〉として捉えた直示的判断もラッセルの原理を満たすことになる（注8）。

#### （6）自己同定と免疫性

エヴァンズは基本的に同様の説明を、〈ここ〉観念（場所の同定）や〈私〉観念（自己同定）の取り扱いにも拡張する（注9）。直示的観念を可能にする情報リンクが、対象の知覚を成立させるようなリンクであったのに対して、〈私〉観念を可能にする情報リンクとしては、固有感覚や記憶のメカニズムの働きによるものなどが挙げられる。また、対象の直示的観念を支える基礎的観念には、当該対象に該当する種概念についての理解が必要とされたが、〈私〉観念にとっての基礎的観念は「人物」という概念によって形作られる（VR,

p. 211)。

直示的観念、〈ここ〉観念、〈私〉観念が本質的に共通した性格のものであることは、これらの観念を——それに相応しい情報リンクの支えの元で——用いた判断が総じて、シェーメイカーの言う意味での免疫性を示すという点に見て取られる。例えば、或る情報リンクを介して、F という特性が事例化されている（何かが F である）旨の情報が得られ、かつ、その同じ情報リンクによって対象の直示的観念が成立するとすれば、主体がその際の〈これは F である〉という判断について、「F であるのは果たしてこれなのか？」と尋ねることは全く意味をなさない。この場合の〈これは F である〉という信念は、何か別の観念 a を用いた〈これ = a〉および〈a は F である〉という一対の信念からの所産ではない（注 10）。そこでの情報リンクの働きを通じて〈何かが F だ〉と信ずることは、同時にまた、その同じ情報リンクを通じて〈F であるのはこれだ〉と信ずることに他ならないのである。

\*\*\*

われわれは、一方では、様々な概念的能力によって構成された「概念システム」であると同時に、また他方では、多様な情報リンクを張り巡らせて情報の流れに介入する「情報システム」でもある。直示的同一や自己同一は、この二つのシステムの協働を通じて、世界および自己についての知識を獲得するための切り開く基本的な方式である。これらの同一方式に関するエヴァンズの説明は、概念システムの基本的構造を解明しようとする「思想の理論」と、情報システムの機能を主題とする「情報の理論」にまたがる一般理論に立って展開された。だが、基礎的思想レベルをベースとして構想されたエヴァンズの「思想の理論」は、その有効性および必要性に関して、多くの疑義に晒されている。その一方で、エヴァンズは自らの「情報の理論」のポテンシャルを十分に活用し尽くさなかったようにも見える。結局のところエヴァンズの一般理論は、情報システムの領分に委ねられるべき作業を概念システムに担わせることで、過大な概念的能力を認識主体に要求しているように思われるのである。

本発表ではこうした問題を確認した上で、エヴァンズが提示したそれに代わる基本的構図を——主として Perry [2002]を参照しつつ——打ち出すように努めたい。大まかに言えばそれは、エヴァンズが構想したような形の「思想の理論」（とりわけ、基礎的思想レベルを想定するファンダメンタリズム）を斥け、むしろ情報システムの担う役割をいっそう重視するものとなる。

こうした方向性は正に、エヴァンズが批判したような「写真モデル」理論への回帰に繋がるのではないと思われるかもしれない。したがって、なぜそうではないのかを明らかにすることが、一つの重要な課題となる。

---

・注

(注1) ここで反デカルト主義的な自己像の「権利付け」ということでは言わんとしているのは、自己の物理的本性に関する形而上学的主張を、何らかの意味でそれより先行的・基礎的な主張から導き出そうとするような企て——そうした企ては私には全く見込みのないものだと思われる——ではない。一人称的判断の免疫性に関するエヴァンズの主張からそうした直接的な導出を目指した幾つかの典型的な試みについては、塩野氏が説得的な反論を加えている (Shiono [2001])。私としてはむしろ、自己という概念にまつわる哲学的諸問題に十全に対処できるような包括的な理論的枠組みを構築する作業を通じて初めて、そうした権利付けは真に成し遂げられるものだと考える。ここでの考察も、こうした作業へのささやかな寄与となることを目指している。

(注2) 本稿で検討するのは基本的に『指示の諸相』(Evans [1982]) でのエヴァンズの立場である。エヴァンズ自身がこの立場に決して満足していなかったことは、この著作の幾つかの箇所からも見て取られる。また、いわゆる「モリヌークス問題」を主題とした論考 (Evans [1985]) には新たな理論展開の萌芽が見られるが、本稿では立ち入る余裕がない。なお、『指示の諸相』の参照ページは、「VR」という略記に添えて示すことにする。

(注2 a) 括弧 (… ) に括弧で表してあるのは、思想、もしくはその構成要素としての観念である。

(注3) 本稿ではエヴァンズの用法に倣い、対象の基礎的観念一般を表すシェーマ文字として「 $\delta$ 」を用いる (VR, p. 108, n. 31)。なお、特性の観念もまた、対象の基礎的観念  $\delta$  によって説明される。F という特性の観念を持つということは、 $\langle \delta$  は F である  $\rangle$  という形式の任意の命題について、その真理条件を知っているということである (VR, p. 109)。それゆえ、或る対象についての特定の基礎的観念を用いた判断が一般に真理条件の原理を満たすことは明らかである (VR, p. 111)。

(注4) 先の注3で触れたように、特性の観念もまた対象の基礎的観念によって説明されるべきものである以上、思想の基礎的レベルとは派生的観念が、主体の持つ「概念的知識のレパートリー全体」(VR, p. 112) へと結び付けられるレベルということになる。なお、時間を通じて存在する対象に関する思想については、時制に関する因子を考慮して説明はさらに複雑になるが (VR, pp. 110-111)、ここでは時間的次元に関わる部分は省いて

簡略化している。

(注5) 他者とのコミュニケーションを通じた情報獲得のメカニズムも、人間の認知的成長のごく早い段階から既に働いている (VR, p. 124)。近年のミリカンはこうした方向をラディカルに押し進め、言語的コミュニケーションや意味理解の解明を進化生物学もしくは動物行動学の一章として位置付けようとする (Millikan [2004])。

(注6) エヴァンズは直示的同定に関する自らの説明を抽象的対象の取り扱いにまで拡張しようとするが (VR, p. 113, n. 37; pp. 198-199)、差し当たって以下ではもっぱら物理的対象のみを問題とする。

(注7) エヴァンズ自身は「自己中心的」空間に対比して「客観的」空間という言い方を using しているが、本稿では誤解の可能性がより少ないと思われる「無視点的」という表現を用いることにしたい。いずれにせよこれらは、唯一の物理的・公共的空間についての表象方式の違いである。

(注8) ここで空間的表象の問題についてやや詳しく見てきたのは、一つには、自己中心的空間のあり方が「私が本質的に行為者だということ」 (VR, p. 156——エヴァンズはチャールズ・テイラーの言葉を引いている) と深く結び付いていることから、『指示の諸相』第7章での——どちらかと言えば行為の側面を軽視した (cf. VR, p. 207, n. 4) ——自己同定論を補うものとなり得るからであり (ちなみに、このワークショップのために当初オーガナイザーから私に与えられたテーマは「行為における自己同定」というものであった)、またもう一つには、空間的表象をめぐるエヴァンズの議論には、彼の見解の全体に付きまとう諸問題が集約的に現れているように思われるからである。

(注9) ただし、一つの大きな違いは、直示的観念のケースとは違って、場所の同定や自己同定の成立にとってはその対象 (つまり、当の場所や自分自身) との間の情報リンクの現実的 (actual) な働きは必ずしも不可欠ではない、ということである。(それゆえに、アンスコム流の完全な感覚剥奪においてさえ、主体はやはり〈私は…〉、〈ここは…〉と考えることができる。)

(注10) 直示的判断のように免疫性を持つ判断への信念は「認識論的な意味で基本的」 (VR, p. 181, n. 53) であり、そうした判断は他の判断に対して「認識論的先行性」 (VR, p. 181) を持つ。これを、「思想の理論」における意味——判断の可能性に関わる意味——での直示的判断の非基礎的・派生的性格と混同してはならない。免疫性は知識や信念、正当化等に関連した認識論的現象である。

---

・文献

Evans, G. [1973] "The Causal Theory of Names"

Evans, G. [1982] *The Varieties of Reference*, Oxford University Press.

Evans, G. [1985] "Molyneux's Question," in *Collected Papers*, Oxford University Press.

Millikan, R. G. [2004] *Varieties of Meaning*, MIT Press.

Perry, J. [2002] "The Self, Self-Knowledge, and Self-Notions", in *Identity, Personal Identity, and the Self*, Hackett.

Shiono, N. [2001] "Bodily Awareness and Its Subject", *The Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, vol. 10.

Shoemaker, S. [1968] "Self-Reference and Self-Awareness", *Journal of Philosophy*, vol. 65.

Shoemaker, S. [1970] "Persons and Their Past", *American Philosophical Quarterly*, vol. 7.